

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：14403

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K04301

研究課題名(和文) 相互作用における意味構成への記号論的アプローチと心理学方法論の再検討

研究課題名(英文) A new look at the research methods of psychology based on the semiotic approach to the process of meaning construction in daily interaction

研究代表者

小松 孝至 (KOMATSU, Koji)

大阪教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：60324886

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,900,000円

研究成果の概要(和文)：ことば(記号)を媒介とした個人の意味世界のなりたちと自己のあらわれのプロセスに関する理論的枠組みを構成した。この枠組みは、文化心理学の記号論的アプローチに基づき、子どもの参加する会話や子どもの書く日記を、他者性や弁証法的なダイナミクスに着目しつつ分析することで得られたもので、意味構成(構築)と自己のあらわれを表裏一体のプロセスとして考える。今後、発達心理学や教育心理学をはじめとした心理学研究における質的分析の基礎となることが期待される。さらに、当課題を基課題とした国際共同研究に基づき、その成果は欧文モノグラフとして公刊された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ことばが意味を持つとは、本来きわめて動的な現象であり、例えば、ある人が発したことばの本人にとっての意味と、それを聞いた者がそこから構成する意味は異なる。一方、そうしたずれも包含しつつ、会話においては新たな意味が創出されていく。本研究では、母子の会話の録音記録や、小学生が学校の課題として書いた日記の分析を通して、このような「意味構成」の過程を「自己」の概念と結び付けた理論的枠組みをまとめた。心理学方法論の理論的基礎をより充実させるとともに、コミュニケーションの本質的理解にも役立つことが期待される。

研究成果の概要(英文)：In this study, a theoretical framework concerning both the process of meaning construction and the emergence of self was constructed based on the qualitative analyses of child-mother conversation and children's writings about their experiences. The framework also relies on the semiotic approach of cultural psychology and focuses on the role of otherness and dialectic tensions that prepare and promote the process of meaning construction. Although it is based on the analyses of children's meaning construction, the result of this study offers a theoretical foundation to a variety of psychological studies that analyze qualitative data obtained from interviews or observations of interaction.

研究分野：発達心理学・教育心理学(自己の発達)

キーワード：発達心理学 文化心理学 意味構成 自己 弁証法 記号的媒介 社会・文化的アプローチ

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

発達心理学や教育心理学の研究においては、インタビューデータや相互作用データ(例:会話や授業の記録など)の分析を中心に、個人の意味構成(意味構築)、例えば研究協力者によるある経験の意味づけをとらえることが重視されることが少なくない。しかし、こうした過程で、ことばを媒介に創り出される「意味」をどうとらえるかについて、心理学の議論は深まっていなかった。結果として、研究協力者の発言が、そのまま「経験」「意味づけ」として提示されることも少なくない。

しかし、研究協力者の発したあることばを研究者が解するとき、そこではすでに異なる人物(研究協力者・研究者)による異なる過程で「意味」が生じている。さらに、それが研究としてまとめられれば、そこには読者の視点も関わってくる。つまり、記号としてのことばと、個人の意味世界の成り立ちを、研究者の立ち位置も含めて理解する枠組みが必要となる。そして、この枠組みは、その意味を生成する主体の「自己」のあらわれとも深く関係しており、上で述べた質的データだけでなく、質問紙による調査など心理学の研究法の多くに関わる問題である。

この研究では、以上のような問題意識をもとに、研究代表者がこれまで取り組んできた子どもの発話や日記に対する記号論的なアプローチを基礎とした理論的枠組みの構築を試みた。

### 2. 研究の目的

上記「背景」で述べた問題意識をもとに、本研究では意味構成と自己のあらわれを密接に結び付けた理論的枠組みを構築し、その上で、心理学の種々の研究手法を含む相互作用の本質を捉える理論的な考察を目的とした。その際、次の諸点に着目した。

1点目は、意味構成における対話的(dialogical)、弁証法的(dialectic)なプロセスの理解である。本研究が理論的な基礎とする、文化心理学における記号論的アプローチの主導者である、Jaan Valsiner 教授(デンマーク、オールボー大学)の理論においても、弁証法的プロセスは意味構成の分析において重視されており、本研究はその理論的考察をより具体的な子どもの発話や日記に適用しつつ、いくつかの観点からこの枠組みに加える。

2点目は、意味構成と自己のあらわれにおける他者性(otherness)の役割の理解である。上記の対話的プロセスにおいても、また、本研究が分析対象とする子どもの会話や日記といった意味生成の場においても、他者の存在はプロセスの不可欠な一部分である。このことをふまえ、我々の生活の中で他者性が明確になり、意味構成の起点となるありさまに着目する。

### 3. 研究の方法

本研究は、大きく分けて理論的考察と、その質的データへのあてはめを往還する形で実施した。

理論的考察においては、上で述べた Valsiner 教授からの助言をふまえ、20世紀初頭から前半にかけて、認知発達や自己論をめぐってなされた理論的考察を本研究の基礎とする。具体的には、L. S. Vygotsky、G. H. Mead などの理論的考察をふまえながら、理論的枠組みの基礎を構成する。

こうした考察を、研究代表者がこれまで長期間にわたり収集・分析してきた幼児とその母親の会話の縦断的な録音記録、小学校で実践される日記指導において児童が書いた日記の記録など、子どもが参加する言語を媒介とした意味構成過程の記録に適用し、そこでの意味構成と子どもの自己の明確化過程を分析する。また、子どもの具体的な生活のあり方を、こうした過程と一体のものとして考察する。

なお、研究代表者は本研究課題を基課題として「科学研究費 国際共同研究加速基金」に応募して認められ(課題番号 16KK0056 研究期間 2017年度 - 2019年度(その後1年の延長を実施))、2018年3月より9月までデンマーク、オールボー大学へ長期出張を実施し、本課題の内容を発展させた研究を Valsiner 教授との共同研究の形で実施した。

### 4. 研究成果

本研究の主たる研究成果は、上記「国際共同研究加速基金」研究の成果でもあるモノグラフ(Komatsu, 2019)に統合的にまとめられている。その内容は、次のようにまとめられる。

**意味構成と Gestalt quality としての自己:** 子どもたちをはじめ、我々は常に記号を用いながら過去を意味づけ、未来を予測しつつ生きる存在である。そうした意味構成の過程は、同時に我々の「自己」が明確化するプロセスといえる。L. S. Vygotsky や S. Langer らの考察、また、von Ehrenfels による Gestalt quality のアイデアをふまえて概念化するなら、自己を意味構成のプロセス全体から観察者が「見てとる」ものとして考察する必要がある。これは、presentational self (観察者にとって固有の意味を創出する、会話における自己と他者の布置から現れる自己(Komatsu, 2010, p.209))として概念化できる。

**Presentational self の基本的枠組み:** この概念は、現在主流の心理学における自己の概念化、すなわち、個人の内面に安定した実体として存在する「自己像」とは異なる。そうした自己を、意味構成の「結果」から理解される自己と考えるならば、本研究が提案するのは、意味構成の「過程」から理解される自己といえる。その基本的枠組みは、保育園での経験に関する母子の会話を例とするなら図1のように示すことができる。

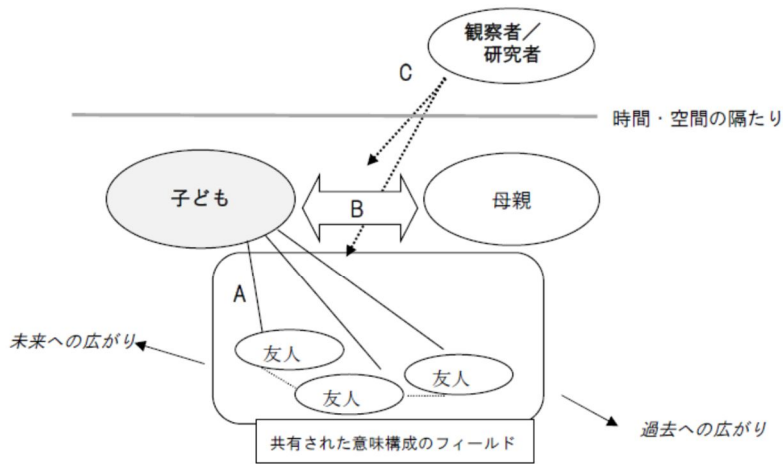


図1 Presentational Self の枠組み (Komatsu, 2019, p.48, Fig 4.2 を翻訳)

ここで子どもの自己とは、会話という共有された意味構成のフィールドの中で子どもと他の子どもたちが比較され作り上げられる布置(図中A)、そしてそれを通して子どもと母親が互いに位置どることから見える布置(図中B)を、観察者(研究者)が時間・空間の隔たりに超えて観察することで理解される(図中C)ものである。

**経験を書くことによる意味構成と他者性：**ここでつくられた枠組みを、特定の宛先を想定して経験を書くことによる意味構成(小学校の活動として書かれた児童の日記)に適用すると、そこでは、presentational self 概念の基礎となった親子の会話とは異なる、多重な形で他者性(otherness)が機能していることを見てとることができる。つまり、書くことよって自己の経験がいわば外在化されることによる他者性と、想定される読み手(ここでは担任教諭)の存在という他者性であり、さらに、子どもたちはしばしば他者との会話を書くことにより、意味構成を促進していた。こうしたプロセスによる自己の明確化は、歴史の中で綴方教育や作文教育が強調してきた意義ともつながりうるものである。

**意味構成を支え促進する弁証法的プロセス：**presentational self の枠組みにおいては、具体的な発話の進行における意味構成が、記号論的アプローチで強調される弁証法的なダイナミクスによって、つまり「A」という発話に付随する、潜在的な意味生成のフィールドである「non-A」との緊張関係の中で発生・展開していくとされている。本研究では、この、いわばミクロレベルのダイナミクスに加え、子どもたちの生活の中にある構造自体が、意味構成を促進する弁証法的な緊張関係にみちていることを考察した。

端的に言うならば、それは生活の中に遍在する再会(reunion)と、そこから生じる2種類の緊張関係「可視 <> 不可視(visible <> invisible)」「同一 <> 非同ー (same <> non-same)」である。我々が再会をくりかえすことは、互いが可視・不可視の存在になることを意味する。ここで再会が再会として成り立つことは、自他の同一性が認められることによるが、同時に、その不可視性は同一性の脅威ともなる。本研究が考察した意味構成の具体的なプロセス(会話や日記)は、こうした繰り返し構造と弁証法的な緊張関係が基礎になっている。

以上の本研究の結果は、「1. 研究開始当初の背景」で述べたように、心理学、特にインタビューデータや相互作用データを研究する心理学において、十分深められてこなかった課題について、具体的なデータをもとに、また、心理学の基礎ともなった20世紀前半の理論的考察をもふまえて理論的枠組みを精緻化したものである。そして、本研究が主な分析対象とした、子どもの発話や日記の記述にとどまらず、いわゆるナラティブ・アプローチなど、心理学における質的研究の理論的基礎の1つとなると考えられる。また、研究成果をまとめたモノグラフ(Komatsu, 2019)は、国際共同研究加速基金によりオープンアクセスとなっており、当該領域の研究において国際的な発信がなされている。

加えて、本研究においては量的アプローチによる研究者とのシンポジウムにおいても、(量的研究のための)「カテゴリー」を創り出す過程に着目した発表を実施するなど、今後、心理学の幅広い領域に結果が応用され、その理論的な精緻化に貢献できるものと期待される。

< 引用文献 >

Komatsu, K. (2010) Emergence of young children's presentational self in daily conversation and its semiotic foundation. *Human Development*, 53, 208-228.  
 Komatsu, K. (2019) *Meaning-making for living: The emergence of the presentational self in children's everyday dialogues*. Springer.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計8件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Koji Komatsu
2. 発表標題 Reunion in daily life and the emergence of children's selves
3. 学会等名 10th international conference on the dialogical self (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Koji Komatsu
2. 発表標題 Why meaning construction sometimes develops to clarify our self: The role of invisibility and non-sameness in dialogical processes
3. 学会等名 17th Biennial Conference of the International Society for Theoretical Psychology (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小松孝至
2. 発表標題 日常の相互作用から同一と非同ーを考える
3. 学会等名 日本発達心理学会第27回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小松孝至
2. 発表標題 生活の中の意味構成・自己のあらわれとしてのナラティブと他者
3. 学会等名 日本発達心理学会第27回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Koji Komatsu & Maria Elisa Molina
2. 発表標題 Values in action: Development over life course
3. 学会等名 The 31st International Congress of Psychology
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小松孝至
2. 発表標題 宗教的図像から考える他者性のあり方と意味構築プロセス
3. 学会等名 日本質的心理学会第13回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 小松孝至
2. 発表標題 子どもの意味構築と自己のあらわれをもたらすものとしての不可視性
3. 学会等名 日本発達心理学会第28回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小松孝至
2. 発表標題 カテゴリーを生成しデータを分析する難しさ（シンポジウム：文系学生に対する心理統計教育）
3. 学会等名 日本教育心理学会第61回総会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 Koji Komatsu	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Springer	5. 総ページ数 144
3. 書名 Meaning-making for living: The emergence of the presentational self in children's everyday dialogues	

〔産業財産権〕

〔その他〕

本研究の研究成果（モノグラフ・オープンアクセス）へのリンク  
<https://opac-ir.lib.osaka-kyoiku.ac.jp/webopac/TD00031296>

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----